

玫瑰誌 — 西洋文化の表象としての —

吉野 政治

バラ科 Rosaceae バラ属 Rosa に属する植物の和名の多くは

1 バラ・薔薇・Rose

「○○バラ」「○○イバラ」と名づけられているが、ハマナス（学名 Rosa rugosa、漢名「玫瑰^{まいかい}」）とチヨウシユン（学名 Rose chinensis、漢名「月季花」また「長春」とも）はその例外である（松村任三著『改正増補植物名彙』、本田正次著『日本植物名彙』、『牧野日本植物図鑑』による）。これはこれらの種がその名で近代植物学の受容以前に日本で定着していたことに因るようである。チヨウシユン（長春）という名が日本の文献の中にどのように現れ、どのように鑑賞されていたのかとといったことについては、「そうび」（薔薇）という名とともに、断片的ではあれ、既に言及されている。本稿ではハマナスの漢語表記「玫瑰」が幕末から明治維新前後において西洋文化の表象的意味を担っていたことを明らかにしたい。

「玫瑰^{はまなず}」を始めとして本稿で取り上げるさまざまな名前のバラは、総称としてのバラ（薔薇・Rose）属に属する種である。そこで、「バラ」「薔薇」「Rose」という語について簡単に押さえておくことにする。

和語バラ（古くはウバラ・イバラなどの語形であった）は刺の意味であり、また刺のある灌木（小低木）の総称としても用いられた^{注①}。現在では野生種、園芸種を問わず、バラ科バラ属に属する植物の総称としても用いられている。したがって、「○○バラ」「○○イバラ」と呼ばれるものは次のように分類できらる。

バラ科（野生種）ノイバラ・ヤブイバラ・サンシヨウバラ・タカネバラ・カラフトバラ…

(園芸種) モッコウバラ・コウシンバラ・イザヨヒ

バラ・サクラバラ・ナニワイバラ：

非バラ科 サルトロイバラ・ジャケツイバラ：

漢語「薔薇」はもと「牆靡」と書かれていた。李時珍の『本

草綱目』(明・萬曆三十一年1603刊)第十八卷上・蔓草類の

「営実牆靡」の項に「**釈名** 薔薇：刺花(綱目) **時珍曰** 此草蔓

柔靡、依牆援而生。故名牆靡。其茎多棘刺二勒入一」とあ

る。すなわち、「薔薇」は柔らかな茎を延し、牆に凭りすがつ

て成長し、茎にある多くの刺によって牆の中に入るのを制する

ので「牆靡」と名づけられたという。やがて字体を変え「薔

薇」と書かれるようになったが、「薔薇」は和語バラと同様に

バラ科の総称としても用いられるようになる。牧野富太郎「薔

薇とは元来何であるのか」(『植物一家言』所収)に言う。

すなわちこれ(薔薇のこと。引用者注)はノイバラ、一名

ノバラのことで、その学名は *Rosa multiflora* Thunberg

と言われる。『秘伝花鏡』と題する、中国の書物に、特に

これを野薔薇と書いてあるが、それは畢竟、野薔薇、すな

わち薔薇である。そして同書で見ると、薔薇を、種々の品

種の総名に成して用いてあれども、しかし、前述の通り、

本来は、ノイバラ専用の名称たるに他ならざりしもので

あった。今日では、この薔薇の字を、広範な意味に用い、

すなわち *Rose* (*Rosa*) のものなれば、何品に限らず、

何でも薔薇と言っている。

同様の説明は既に貝原益軒『花譜』(元禄七年1694刊)にも

見え、白井光太郎『植物渡来考』(昭和四年1929有明書房刊)

などにも見られる(注②)。

Rose (ラテン語 *Rosa*) の語源は不明だが(注③)、平賀源内

は『物類品隲』(宝暦十三年1764刊)で「紅毛人オランダ都バタ刺バタ絲バタアル

モノオランダローズト云」と言っており、少なくとも当時、ローズは

刺のある植物を意味したようである。現在では *Rose* バラ科の

植物の総称としても用いられる。

2 『花壇地錦抄』の荊棘いばら

さて、バラ科の植物は日本自生種は少ないものの(注④)、現在

ではその改良種が作られたり、また多くの渡来種も渡来し、さ

らにその改良種も作られて、現在では多くの観賞用の園芸種を

見ることが出来る。既に江戸初期江戸染井の花戸(植木屋)三

之丞の著『花壇地錦抄』（元禄八年〔1695〕刊）には次のような十三種の「荆棘」類が載せられているが、そのうち半数以上は渡来種と考えられるものである。

はまなす

春末 花こいむらさき、ひとへ、大りん。

らうざ

花さくらいろに見ゆ。八重・ひとへ・大りん。ろうざ・はまなすは薬種に用。

長春

こいむらさき、中りん、八重、亦赤きやうに見ゆ。四季ともに花さく。

白長春

八重、白、四季二咲。桜色に見ゆる。

狸々長春

くれない、ひとへ、四季二花さく。

はと荆

夏始 八重、ひとへあり。白、中りん。

牡丹荆

夏中 紫、八重、大りん。

ちやうせん荆

春末 白、大りん、花形つばきのごとし。

ごや荆

夏初 八重、中りん、うす赤。

山柵荆

うす紫、八重、中りん、葉さんせうのごとし。

し。

箱根荆

夏初 白大りん、ひとへ。

唐荆

春中 白、八重、大りん。なるほどせんや

うなり。花形ふさのごとし。青きほど白し。

荆茨

夏初 花形藤のごとく、色うこん。上々

「ハマナス」「らうざ」については本稿のテーマに関わるものであり、後に詳述する。「長春」は中国原産であり、王象晋の『二如亭群芳譜』（天啓元年〔1621〕成）に「月季花 一名長春花」（花部卷之二）とあるように、「月季」とも呼ばれる（現在の中国では「月季」が用いられている）。藤原定家の『明月記』建暦三年（健保元年〔123〕）十二月十六日条に「籬下長春花猶有二紅蕊云々」と見え、既にこの頃には栽培されていたように見えるが、『立華指南』（作者不明、貞享五年〔1688〕刊）に「長春：荆薔薇の内より出て長春は一種別に有。本草に長春は金盞花の異名也と有」とあるように「長春」は金盞花の異名でもあり、『明月記』の「長春」がバラ科の植物であったかどうか確定できない。ただし、『立華指南』は続けて「古今誤り来りつれば其ま、しやうびの事と心得たる、然るべし」とあり、少なくとも江戸時代には「長春」と言えばバラの月季のことを指したようである。また、『立華指南』に言うように、我が国で次のように古い文献に見える「さうび」（薔薇）と呼ばれていたものは、この長春（すなわち月季）のようである。

我はけさ初にぞみつる花のいろをあだなる物といふべかり

けり 貫之 (古今集卷10・四三六 物名「薔薇」)

さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつかしけれどおかし。雨などはれ行たる水のつら、くろぎのはしなどつらにみだれさきたる夕ばへ。(枕草子)

階の下の薔薇、けしきはかり咲きて、春秋の花さかりより

もしめやかにおかしきはどなるに、(源氏物語・賢木)

むかしおほゆる花たちばな、なでしこ、さうび、くたになどやうの花くさぐさうへて、春秋の木草その中にうちまぜたり。(源氏物語・少女)

階の下の薔薇も夏を待ち顔になどして、さまざまにめでた

きに、(栄花物語・つぼみ花)

「長春」の名は花期の長いことからいう。『二如亭群芳譜』などにもその旨説明されているが、貝原益軒の『花譜』にも「月季花 毎月花ひらく故、和俗に長春といふ」とある。

「白長春」「猩々長春」は「長春」の一種あるいは改良種であろう。「ちやうせん荊」も同様かと思われるが、小野蘭山の

『本草綱目啓蒙』(享和三年1803成)には、

○月季花 長春 通名 チャウセン(長春ノ音ヲ訛ナリ) 四季

サキノイバラ、カウシンバナ京…「一名」長春花(群芳

譜) 月貴花(広州新話) 月記(同上) 人家多ク栽。薔薇ハ藤本、コレハ木本ナリ。…ツノ花四時ニヒラク。故ニ庚申バナト云。(卷十四上・草四・蔓草)

とあり、「長春」の訛名とする。

「はと荊」は未詳。以下のものも未詳あるいは何に同定するか諸説あるが、「牡丹荊」は白井光太郎は「此種伝来を詳にせずと雖も、現今培養する西洋薔薇に類似せるものなれば、徳川時代の初頃外船により輸入せられしものならんか」とされる(「園芸植物の来歴」『本草学論攷』昭和九年1934刊所収)。「

荊」は一名「菩薩茨」、漢名は「七姊妹」また「十姊妹」で、中国原産の園芸種とされる(北村四郎監修『本草図譜総合解説』同朋社出版)。「山柃荊」は「本州静岡・神奈川・山梨の諸県・箱根と富士を中心として山地にはえる」(「原色牧野植物大図鑑」)とあり、「箱根荊」もその名から日本自生種のようにである。「唐荊」はその名から渡来種と思われる。「はと荊」は未詳。「荊茨」も日本に自生するが、バラ科の植物ではない。

3 「らうぎ」の同定

ところで、「らうぎ」は漢語「薔薇」の音読であることは言うまでもないが、白井光太郎が「サウビは薔薇の漢名を字音の儘に呼びにしものにて、当時此等の培養的變種を漢土より輸入したるも、適當の和名を得ざるものから斯く呼びなせるものなるべし」（「園芸植物の來歴」と言われているように、そのような理由からとりあえず原語を用いたものと考えられる。「らうぎ」Rosaもまた同様に、西洋から新しく入ってきたものを同定できる和種あるいは漢種を見出しえなかつたことから、とりあえず用いたものであろう。熊秀英（森島中良）著『類聚紅毛語訳』（改題『蛮語箋』。寛政十年1798刊）に「薔薇 ローザ」とあるが、これは「らうぎ」を総称としての「薔薇」の一種と捉えたことを示すものと思われる。「らうぎ」の名は西川正休（如見）の『長崎夜話草』（万治二年1659刊？）の「付録」として載せる「長崎土産物」の中に「南蛮紅毛より伝へたる草木多し」とあり、その中に「らうぎ花」と見えるのが初出のようである。『花壇地錦抄』以降では貝原益軒の『大和本草』（宝永五年1707刊）の卷十二に、

蛮種

ラウザイバラ 紅夷ヨリ來ルト云。花大二葉小也。山椒ノ葉ニ似タリ。枝條曲節多クシテ不_レ舒_レ。挾テ活ク。有_レ刺。是又薔薇之類而花葉較_レ異ナル者也。四月開_レ花至_レ秋。又牡丹イバラト云。花頗牡丹ニ似タリ。又箱根イバラ此單葉ナリ。

と見え、『地錦抄附録三』（1733刊）にも「正保年中以後渡り來る草木の類」の中に「らうぎ」と見える。正保年間（1644～1648）に南蛮から入ってきたものようである。

一方において、この「らうぎ」を漢種に同定しようとする試みも行われている。例えば我が国でも広く読まれた陳湔子の『秘伝花鏡』（康熙二十七年1688刊）の卷四藤蔓類には、広義のバラと呼べるものに「薔薇」「玫瑰」「月季」「野薔薇」「繚絲花」「荼靡」が載せられているが、そのいづれに同定するかという試みである。管見では三つの説がある。

ひとつは「繚絲花」に同定するものである。後藤梨春の『紅毛談』（明和二年1795刊）に、

○らうぎ 漢名繚絲花といふ。いばらの類なり。其はなしろく、八重_やにして牡丹_{ぼたん}いばらのごとし。此花の露_{つゆ}をとつて、

諸腫物に用ゆ。

とあり、柴野栗山原著・柴野貞毅重修『雑字類編』（天明六年1786）にも、

繚絲花（ロウザイバラ〔右訓〕、ヲランダイバラ〔左訓〕）

とある。ただし、「繚絲花」と「ロウザイバラ」とは貝原益軒の『大和本草』では別種のものとして扱われていたものである。

「ロウザイバラ」についての益軒の説明は先に引いたが、「繚絲花」については次のようにある。

繚絲花 をらんいばら 遵生八牋云、花葉玫瑰花に似て、白うす紫なり。

香なし。枝にはりあり。此の花はるる紅夷まらより来る。故に名尽く。

ただし、彼の『大和本草諸品図』に描かれている「ロウザイバラノ花」は沈丁花に似ており、その同定の確かさには疑問がある。また益軒は「ロウザイバラ」を「牡丹イバラ」とも言うと記していたが、寺島良安の『和漢三才図会』（正徳二年〔1691成〕）にはバラ科の植物として「繚絲花 おらんだいばら」以外に「墻靡 しやうび」「仏見笑 ほたんいばら」「茶靡花 こやをき」「玫瑰花 はまなす」「月季花 ちようしゅん」があげられており、「ロウザイバラ」と「牡丹イバラ」を別種のものとしている。

説明がやや複雑になったが、当時の同定作業の困難であったことが窺えるであろう。

二つめは「茶靡花」（酴靡花）に同定するものである。水谷

豊文の『物品識名』（文化六年1809刊）に、

ロウザイバラ トキンイバラ 茶靡花 秘伝花鏡

とある。しかし、「茶靡花」には棘はあるものの、香りはない。益軒の『花譜』では、

酴靡花 こやをき 此草、葉は覆盆葉ふくせんに似て、茎方にして長く、はり

おほし。草くきなり。薔薇のごとくなる木茎にあらず。花はしろき千葉にして、しやうびに似たり。又菊牡丹にも似

たる故、西国にては、菊いばらといひ、関東にては、ぼたん花といふ。

と説明されていたものであり、『和漢三才図会』でも「繚絲花 おらんだいばら」とは別種のものとして挙げられていたものである。

三つめは「玫瑰」に同定する説である。最初にこの説が見られるのは宇田川玄随（槐園）著『西洋医言』（寛政四年1792序・未刊）の、

薔薇謂ニ之ヲ羅生ニ。玫瑰花謂ニ之ヲ羅垓羅生ニ。

であり（羅生、羅挫羅生の左にそれぞれ roozen, roode roozen と朱筆あり。早稲田大学図書館デジタル古典総合データベースによる）、次いで早いのは森島中良の『類聚紅毛語訳』（『蛮語箋』）の、

玫瑰（右訓ラランタバ。左訓ハマナス） ロート、ロー
セシ

のようである^{注50}。

この三つの説の中から「玫瑰」に同定する説が以降受け入れられていくことになるが、この同定にも少しの注釈が必要のようである。というのは、『蛮語箋』に「玫瑰」の和名をハマナスとし、伊藤伊兵衛の『地錦抄附録』（享保十八年〔1733〕刊）にも「玫瑰」とあるが、これについて北村四郎氏は「ハマナスと仮名がつけてあるが、ハマナスは日本に野生している。玫瑰はハマナスからでた、中国中部でつくられた園芸品である。おそらく、ほんとうの玫瑰が入ったのだと思う」（栽培植物の起源・伝来・分類 園芸史から見た日本の花）『北村四郎選集 Ⅲ』保育社刊所収 p.194）と述べられている。今日の植物学的観点から厳密に言えば、当時「玫瑰」という名で呼ばれていたものと日本のハマナスとの関係はそのようなものであったと思

われる。花戸（植木屋）の著作である『地錦抄附録』では「らうぎ」と「玫瑰」は異なるものとしたのはそのためであったものと思われる。したがって、江戸時代にもたらされた「らうぎ」は、当時においては「漢名不詳、玫瑰（和名ハマナス）に似る」とでも説明されるべきであったろう。しかし、森島中良は花戸でも本草家でもなく、その著『蛮語箋』もまた一般向けの蘭日単語集であるところから、およその対応を示したものである。そして、この「玫瑰＝ハマナス」という説が定着していくことになったものと思われる。

ちなみに、現代の『原色牧野植物大図鑑』ではハマナス（ハマナシとも）とマイカイ（玫瑰）は次のように説明されている。現在の植物分類学でも諸説あるようだが、一つの説として次に掲げることにする。

ハマナシ *Rosa rugosa* Thunb.

太平洋側は茨城県、日本海側は鳥取県以北、北海道、および千島からアラスカ、朝鮮、中国に分布し海岸の砂地にはえ、観賞用に庭園にも栽植する落葉低木。高さ1〜1.5m。

地下の枝で繁殖し大群落を作る。花は初夏から夏、径6〜8cm。果実は2〜3cm、秋に赤く熟し食べられる。根は染

料に、花から香水の原料をとる。和名浜梨、別名は東北なまりからきたもの。

マイカイ *Rosa odorata* Sw. var. *linea* Makino

中国原産で、江戸時代あるいは昭和になって渡来し、栽培される高さ1mになる落葉低木。ハマナシに似ているがとげが少なく、花は重弁で色が濃く、香気が強い。中国ではつぼみのうちに採り陰乾にして茶に入れたり、酒に浸したり、また蒸留して玫瑰露まがじろうを作る。和名は漢名の音読。種小名は芳香のある意味。

すなわちハマナシ（ハマナス）が自生種であり、マイカイが中国種である。そしてこの他に西洋種があることになる。その西洋種は同図鑑には次のように説明されている。

セイヨウバラ *Rosa hybrida* Hort.

ヨーロッパから西アジア原産、歴史が古く、改良を重ねたもので大輪重弁の雑種性。広く庭園に植栽される常緑低木。高さ1〜2m。枝は硬く、平たいとげをもつ。葉は通常5葉からなる。花は一季のものから四季を通して咲くものがあり、1〜数花の大形で芳香を放つ。鑑賞や香料の原料として紀元前2000年代から栽培された。和名はヨーロッパ

パで作られたバラの意。

4 薔薇露

バラから抽出する強い芳香を放つ液体は、中国においても日本においても、早くから香水として知られていた。また薬用にも食用にも香料として用いられることも知られていたが、C.M. スキナー『花の神話と伝説』（垂水雄二・福屋正修訳、八坂書房1998）によれば、バラの露を香水や医薬などに使うことは、バラが初めて歴史に登場した時にまで遡るといふ。

プリニウスによれば、その時代、バラは香水や軟膏だけでなく、医薬品の成分ともされたようで、「軟膏および洗眼薬」の項に入っている。プリニウスはバラの葉および花びらを調合した三三の医薬を挙げており、バラ酒をつくる処方も書いている。バラ酒を飲んでバラの花びらを詰めた枕で寝ると、あらゆる芳香性のものがさうであるように、神経症を和らげると書かれている。しかし、同時に、バラ酒の風呂につきり、バラのサラダを食べ過ぎ、バラの臥床で身を休めたために病気になるたへリオガバルス皇帝「ロー

マ皇帝、二〇三（二二二）が、「バラの一飲み」で健康を回復し、それによって、未来の世界にホメオパチーの方法「同毒療法または類似療法」を残したことの次第も伝えられている。

古い時代には、バラの香水、バラ軟膏、バラのジャム、バラの砂糖漬け、ロウに封じたバラ、炭にかけて燃やすバラ油、バラのソース、バラのクリーム、バラのちんき、パステル、ペースト、シロップ、ハッカドロップ、コーディアル「甘味入りアルコール飲料」などを使っていた。

(P.264)

バラの香水が中国に入った時期については新村出博士に考証がある（『薔薇露』『琅玕記』所収）。

薔薇露また薔薇水という名は、宋史以後の史籍の外国伝にも散見し、『諸蕃志』などの単行者にも記載されているが、バラの香水は宋以前から既に支那に輸入されていたらしく、大食国の名産として瑠璃の瓶びんに貯えて躡で密封されて持ってきたという話である。香気が強烈であつて壘を徹してなかふくいくたるものがあり、数十歩をへだててもにおうとか、人の衣にそそぐと十数日もきえないとか歳余もかお

りがするとかいうような記事がある。南洋諸国にも大食から輸入されて珍重され、それより更に支那に貢物として入ったこともある。

すなわち宋以前から既に知られていたようであるが、明の時代以降の文献に書かれたものを紹介すれば、王世懋の『学圃雜疏』（萬曆十五年〔1627〕成）に「玫瑰は珍しい卉くさではない。しかし色はあでやかで、よく香る。盛んなときは食べたり、身体につけたりすることができる。園林の中には多くうえることができる」（佐藤武俊氏訳）とあり、李時珍の『本草綱目』に見える次の「薔薇露」の説明はよく知られているといへるのである。

宮実墻藤

積名

薔薇、山棘、朱棘、牛勒、刺花

集解

時珍曰：人家栽玩者、茎粗葉大、延長數丈、花亦

厚大、有二白一黄紅紫數色、花最大者名三仏見笑一、小者名三木

香一、皆香艷可レ入、不レ入三藥用一、南番有二薔薇露一云、是

此花之露水、香馥異レ常。

さらに王像晋の『二如群芳譜』（天成元年〔1621〕成）にも「玫瑰」を飲み物に入れて芳香を楽しんだことが次のように書かれている。

玫瑰、一名徘徊花、灌生細葉、多レ刺、類三薔薇一、茎短、

花亦類^ニ薔薇、色淡紫、青蘂黃蘂、弁末白、嬌艶芬馥、

堪^レ久。(下略)

有^レ香有^レ色、堪^ニ入^レ茶入^レ酒^ニ蜜、栽宜^ニ肥土^一、常加^ニ澆
灌^一、性好^レ潔、最忌^ニ人溺^一、潮澆即萎、燕中有^ニ黃花^一者、
稍小^ニ於紫嵩^一、山深処有^ニ碧色者^一。

ちなみに日本本草学の集大成とも言うべき小野蘭山の『本草
綱目啓蒙』(卷十四上・草四・蔓草)では次のように説明され
ている。

『本草綱目』も『二如群芳譜』も江戸期の日本で良く読まれ
た書であるが、「薔薇露」の実物を見たのは、長崎に来たオラ
ンダ人によって持ち込まれたことによることは、平賀源内の
『物類品隨』の次の文章によって知られている。

△薔薇露 綱目、露水條下ニ出タリ。和名バラノツユ。紅毛
語ローズワートル。紅毛人都テ刺^パ絲^ラアルモノヲ ローズト
云。ワートルハ水ナリ。此ノ物ランビキヲ以テ薔薇花ヲ蒸
シテ取タル水ナリ。薔薇ノ類多シ。就テレ中ニ野薔薇花ヲ
最上トス。李東壁曰ク、番国ニ有^ニ薔薇露^一。甚ダ芬香。

○営実墻靡(正字通ニ薔薇ニ作。墻ハ牆ノ俗字トス)ムバラ
ノミ(和名抄)ノイバラ(以下苗ノ名…)営実ハ実ノ名。
墻靡ハ苗ノ名。今薔薇ト名ヅク。ソノ家ニ栽テ賞スル薔薇
ハ葉ニイレズ。葉用ノモノハ野薔薇ナリ。故二本経逢原ニ、
薔薇乃野生白花者トイフ。…鍋竈^{ツシキ}ニテ花の露ヲトリ外治ニ
モチユ。紅毛ニテ、ワートルロサートト云。ワールトハ水
ナリ。集解ニ、所謂南蕃有^ニ薔薇露^一トイフ。是ナリ。又、
コノ花ヲトリ生油ニ漬シ日煎スルヲ、オーリーロサートト
云。オーリーハ油ナリ。

云^ニ是^レ花上ノ露水ト^一。未^レ知^ニ是非^一。又墻靡ノ條下ニ曰ク、
南番ニ有^ニ薔薇露^一、云ク是^レ花之露水香馥異常ト。今按ズ
ルニ、ランビキハ番人ノ巧思ニ出ヅ。李氏モ其ノ法ヲ知ザ
ルガ故ニ、カク云ヘルト見タリ。此ノ水外療ニ用テ功效多
シ。紅毛人常ニ長崎ニ持来ル。近世本邦ノ人亦其ノ伝ヲ得
テ是ヲ製ス。然レドモ其ノ製法精カラザレバ水腐テ不^レ

ところで、『秘伝花鏡』には「玫瑰」「野薔薇」には次のよう
に芳香のあることが記されているが、「月季」(長春)について
は芳香のことは記されていない。

【玫瑰】因^ニ其香美^一、或作^ニ扇墜香囊^一、或以^ニ糖霜^一同^ニ烏
梅^一搗爛、名為^ニ玫瑰醬^一、取^ニ於磁瓶内^一、曝過^ニ経^レ

年色香不_レ変、任用可也。

【野薔薇】香最甜似_二玫瑰_一、多取蒸作_レ露、採_二含蕊_一、拌_レ茶亦佳。患_レ瘧者烹飲即愈。

したがって、日本で平安時代以降の文献に見られる「そび」は芳香とは無関係であるということになる。少なくとも早く中国から日本に渡ってきて栽培されていたバラは香りが注目されて鑑賞されていたものではなかったようであり、そうしたことを記した文章も管見では見あたらない。

5 薬用としての「玫瑰」

現在「玫瑰」は止痛、止瀉の中薬（漢方薬）として知られているが、李時珍の『本草綱目』には見えず（唐開元中の陳臓器撰『本草拾遺』には載せるといふが、未確認）、江戸時代の漢方医はこれを使用してはいなかったようである。岡本一包の『公益本草大成』（『和語本草綱目』とも。元禄十一年1698刊）、津田兼詮の『療治茶談』（巻一〜十、明和七年1770〜文政六年1823）といった大部の書にも現れない。むしろ薬草としての「玫瑰」は蘭方医の間で重要視されている。ただし、それは本

草書から得た知識ではなく、ドイツの医者 Woyt の著 Gazo-phylacium Medico-Physicum oder Schatz-Kammer Medicinisch und Naturlicher Dinge から（正確にはそのオランダ語訳から）得た知識のようである。前述のように「ろうざ」を最初に「玫瑰」に同定したと考えられる宇田川玄随の『遠西名物考』（文政五年1793以前成。未刊）に次のように見えるが、引用文中の『医学宝函』とは Woyt の前掲著の訳書名である。（傍線引用者）

玫瑰花

此、薔薇中ノ一種ニ属ス。其性清凉ニシテ収斂ヲ主リ且ツ腦ヲ強壯ニス。生ナル者乾サズシテ之ヲ用レバ微利ノ功アリ。医学宝函ニ詳ナリ。此ノ物多ク海瀨砂地ニ生ズ。移シ藝モ亦茂ス。高サ四五尺ニ至ル。枝幹毛刺尤モ多シ。春時旧幹葉ヲ生ジ形薔薇ニ似テ皺多ク夏ニ入テ花ヲ開ク。立出大サ二三寸。鹵桜花ニ似テ深紅色又粉紅及び白キモノアリ。共ニ甜香馥郁トシテ蘭麝ノ如シ。故ニ宋ノ官人以テ竜驤ニ雑テ容器具ニ充ツト名花譜ニ載ス。和名ハマナス 又サンゴ樹イバラト云。

『西洋医言』は玄随自身の解題によると「紅毛の医書をよミ

玄沢・宇田川玄真記)

玫瑰花コンセルフの製法

玫瑰花の全く開きたるを取り其花卉を摘み取り、萼に附たる白色の端末を除き去り、白に入れ、搗て糊の如くなし柔げて製し置る沙糖舎利別をよくく合和する事前にも説くが如くす。：

乾玫瑰のコンセルフ製法

玫瑰花弁を取り其汚しきものを去りて陰乾し、搗て細末と為し、紅色の布片に包み水に浸すこと二宿にして、よく紅色を引き出し、又其水に玫瑰の細末を加へて適宜に和し、煮てコンセルフの稀濃を為す。是又甚だよろしとす。

(引用者注：コンセルフとは花果根草の類を砂糖と和したるもの。医薬としても食物としても用いた)

○宇田川榕菴『植学独語』(文政十年1827頃成)、

「ローサ」は公称にて数種あり。其内「リュブラ」と私号する者のみ玫瑰に充るなり。

超群ノ捷効アリ。(卷二・一五丁オ)

○『厚生新編』卷二十九(文政四年1821)～文政十年成、大概くべきものであったことを示す資料がある。弘化二年1845刊

習ふ社中の初学に便する為に病名、薬名、鳥獸草木等より一切医事にあづかる蛮語を誦安く、記憶よき様に、爾雅にならひて輯め訳したる書』である(宗田一「宇田川家三代の実学——『西説内科選要』と関連薬物書をめぐって——」『実学史研究』1983.2)。

管見で拾いえた右以外の「玫瑰」は次のとおりである。

○藤林晋山『訳鍵』(文化七年1810刊)

——(rosa) trachinia 玫瑰

○宇田川玄真・宇田川榕菴『増訂和蘭薬鏡』(文政十一年

1828)天保六年(1835)、

玫瑰 「ハマナス」和名、「ローザリュブラ」羅、「ロー

デローセン」蘭

「試効」新撰ニシテ芳香アル花卉ヲ用フベシ。香氣脱スレバ効ナシ。○稍収斂シ清爽強壯ニシ活液ヲ淨刷ス。○

胸病吐血、劳咳、肺瘍、白帶下、月経過多、下痢等ニ輕

キ収斂藥ナシ良驗ヲ称ス。砂糖ヲ研和シ用ヒ、或ハ泡劑

トシ服ス。○諸失血、衄血、嘔血、婦人ノ崩漏等ニ後方

の石原悌介著『蘭薬手引草』（内題『MEDIC. BOEK』博愛室蔵板）は「初学ノ為ニ蘭薬性功ノ大略ヲ知ラシメン」（凡例）という目的で出されたハンドブックであるが、その中に、

玫瑰蜜 治 咽腫潰瘍・鷺口瘡

玫瑰舍利另 同 昆設 治 吐血 崩漏 帶下 劳咳咯血

諸出血

玫瑰油 治 外 止痛。散堅ノ功アリ。

玫瑰チンキ 治 収斂。強壯。防腐ノ功アリ。

と見える。実はこれらのすべては宇田川玄隨の『遠西医方名物考』（文政五年「序・刊」）に見えるものである（『遠西医方名物考』には「玫瑰醋」というものも見える）。

以上のことから考えると、我が国に「玫瑰」というバラ科の植物の名を広めたのは、玄隨―玄真―榕菴と続く蘭方医宇田川家の役割が大きかったようである。

6-1 玫瑰花いげぼたん 聖母マリア

前節の時代からは少し後の幕末明治維新の頃には禁教を解かれたキリスト教の世界において「玫瑰」が現れる。

宣教師ベルナルト・プチジャン Petitjean 達によって編纂された『聖教日課』（明治二年初版、明治七年再版）の「聖瑪利マリ亜ア頌徳の祷文」に

奥ゆかしき玫瑰いげぼたん花

我等の為に願ひ給へ

などと見える「玫瑰いげぼたん花」は聖母マリアのことである。聖母マリアをバラに喩えることは古く遡るようで、研究社の『英語語源辞典』によると、一三九〇年ころに現れ始め、「比類のない人」とくに、絶世の美女、有徳の女性』を意味する rose は、その初期においては聖母マリアを指すことが多い」という注⑥。

右の『聖教日課』からの引用は再版本を底本とする新村出監修『海表叢書』第一巻所収の本文によったが、新村出博士の解説によれば、『聖教日課』は「各経文のテキストは、実は古來迫害の裡に固き信者たちが日々相誦したものであつて、幕末乃至明初の新訳新作ではない」ものである。プチジャン等は幕末キリシタンの復活後に『聖教初学要理』などを一連のキリシタン書を復刊したが、当時発見された浦上・外海地方の旧信者にとつて、解りやすい聞慣れた原語を用いたという（浦川和三郎「日本に於ける公会の復活」、『海表叢書』第五巻新村出解説）。

ただし、プチジャンの復刊書は「原書には忠実であるにしても漢字に満たされ、特殊な教会用語すら漢語に改め」られているという指摘もある（海老沢有道『玫瑰花冠記録』の典拠本附「ろぞりよ十五のみすてりよ図解」『切支丹典籍叢考』昭和十八年五月拓文堂刊所収）。この「玫瑰花」もイゲボタンとあつたものを漢語に直したものであろう。「薔薇花」などではないことはプチジャン等の教養が幕末期の蘭医学者達につながるものであつたことを示すものとして注目したい。

イゲボタンは九州全域で使われていた方言名である。『日本植物方言集成』（八坂書房、平成十三年2001刊）によると、イゲボタンは長崎の他にも福岡（福岡市）・熊本・大分・鹿児島（種子島）で用いられていたようである（イゲは棘とげの意。『日葡辞書』に「Igne 棘。上かみはIgu」とある。「上」は近畿地方（また中国地方）を指し、九州地方を意味する「下しも」に对する）。

また、『日本植物方言集成』によると、バラ科の植物を「○ポタン」と呼ぶ地方は、イゲボタンの他には次のように西日本を広く見られる。

イガボタン 島根（鏡川・那珂） 山口（熊毛） 大

分

イギボタン 島根（鹿足） 山口

イゲドロボタン 熊本（下益城）

イゲブタン 熊本（玉名）

イゾラボタン 大分（大分）

イドラボタン 大分（中部）

イドロボタン 大分

イバラボタン 播州 富山（砺波） 石川 岐阜（養

老） 愛知（知田） 三重（松坂） 京都

（竹野） 大阪（大阪市） 兵庫（但

馬） 奈良 和歌山 愛媛（松山）

バラボタン 香川（三豊）

トゲボタン 大分（大分市・北海部）

テンシボタン 大分

『和漢三才図会』に「仏見笑」を「ぼたんいばら」とし、

『花壇地錦抄』にも「牡丹ぼたん荊」とあり、『大和本草』もラウザイバラの一名として「牡丹イバラ」を挙げ、これを「紅夷ヨリ来ルト云」と言い、白井氏も「現今培養する西洋薔薇に類似せるものなれば、徳川時代の初頃外船により輸入せられしものなら

んか」と述べられていたが、イゲボタンはこのボタンイバラの転訛したものではないかと思われる。『日本植物方言集成』によると、九州地方ではイバラ（野薔薇）は次のように呼ばれており、「イゲボタン」がイバラ（野薔薇）とは別種のものであることは確かである。

長崎…イドラ（対馬）・ヤボ（志岐島）

大分…イガ、イゲ・イガドロ（北海道）・イゲント（大分市）・イゾラ・トゲ・イドラゲス（大分市）、ビ

（別府）

宮崎…イゲゾロ（児湯）・イゾロ（東諸県）

熊本…ネコンツメ（玉名）・ネコズメ（玉名）

鹿児島…バラ

612 「玫瑰花冠」Ⅱ「玫瑰経」Ⅱロザリヨ

ロザリオ rosario（ポルトガル語）はカトリック教会の数珠を意味するとともに、「聖母の十五玄義を冥想しつつその珠を数えながら主の祈り十五回、アベマリア一五〇回、栄唱十五回を唱える祈り」を意味するが（『広辞苑』）、この数珠と祈りを

意味するロザリヨの表記にも「玫瑰」は現れる。

同じくプチジャンの復刊したものに『玫瑰花冠記録』がある。プチジャンが、マニラで一六二三年マニラ刊のローマ字本『ロザリヨ記録』を入手し、翻字して明治二年[1869]に日本で出版したものであるが、その典拠本となったのはドミニコ会士ジュアン・デルエダ Juan de Rueda の著『ロザリヨ記録』である（海老沢有道前掲著）。その『ロザリヨ記録』の表紙には次のように書かれている（海老沢氏による漢字仮名交じり文による）。

ビルゼン・サンタ・マリアの貴きロザリヨのジャルダンとして花園にたとゆる経、同じくゼズスのコフラザアのレヂメントの略。これブレヂカドレスの門派のうちフライ・ファン・デ・ロス・アンヘレスの翻訳なり。スウペリヨルとオルヂナリヨの許しを蒙り、ビノンドクのサン・ガブリエルのオスピタルに於いて板に開くものなり。

御出世より一六二三

この『ロザリヨ記録』には一六二二年に同じくマニラで出された異本がある。同じく日本語をローマ字で綴ったもので、ロザリヨの祈祷の動作の手法を示し、ロザリヨの組（信者集団）のこと、祈祷・連祷などのことを記したものである。その表紙

には次のように書かれている（同じく海老沢氏の漢字仮名交じり文による）。

ビルゼン・サンタ・マリアの貴きロザリヨの修行と、同じゼズスの聖名のコフラチアに当る略の記録、これプレチカドレスの門派のうちバアデレ・フライ・ホアン・デ・ロス・アンヘレスの翻訳なり。オルチナリヨの許しを蒙り、ピノンドクのサン・ガブリエルのオスピタルに於いて板に開くものなり。一六二二

プチジャンの『玫瑰花冠記録』は、この一六二二年版の『ロザリヨ記録』を大増に補改訂した先の一六二三年版の『ロザリヨの経』を翻字して出版したものである。すなわち『玫瑰花冠記録』の「例言」に次のように記されている。

玫瑰花冠記録

童身聖瑪利亞の聖きろざりよの花園に喩る事 じわんでるへた翻訳 おるりなりよ之免しを蒙りまにらにおいて板に開くものなり

御出世より千六百廿三年

じわんでるへいたはいすばにやに生れ、廿四年の間日本に神父の勤をいたし終に琉球において天主に対して首を

刎られ海に沈められ給ふものなり。

此度我天主の御榮福と御母さんたまりあの御誉れの為、又日本切支丹のあにまの扶かりを得させんが為に今再び梓に鏤める也。

御出世以来千八百六十九年日本明治二巳四月廿五日まにらにおいて是を記す

日本 司教 べるなると

右の本文は上智大学キリシタン文庫所蔵の原本復刻版（『本邦キリシタン布教関係資料・プチジャン版集成 第Ⅰ期』10）

『玫瑰花冠記録』雄松堂書店2011年刊）によるが、冒頭の「玫瑰花冠記録」の「玫瑰花冠」にロザリヨと振り仮名がある。プチジャンはロザリヨに「玫瑰花冠」の字を充てたのである。^{注⑩}ロザリヨが「玫瑰花冠」に充てられていることは、巻第一之第五「御母聖瑪利亞をろざと号し奉り又十五の玄義の百五十遍のおらしよをろざりよといふ謂れの事」に、

先、玫瑰といふは妙なる色香を含みて迎りを薫ずる花也。

童身聖瑪利亞を此の花に喩へ、ろざと号し奉るが故に、其告知らせ給ふおらしよを、ろざりよと号する事誠に相当の名なりとへろざと云ハ西音玫瑰花の事。ろざりよとは玫瑰

花冠といふことなり）分別すべし。…とあり、間違いはない。

この「ろざりよ」は『玫瑰花冠記録』の巻第一之八には「玫瑰経（ろざりよのおらしよといふに同じ）」とあり、『聖教日課』には「玫瑰珠十五条（日本のきりしたん（コンタス）とおほへしはこのロザリヨのこと）」ともあつて、「玫瑰経」「玫瑰珠」とも書かれているが、ブチジャンがここでは「玫瑰花冠」に充てたのには理由があるようである。巻第一之五に次のような説明がある（?は判読不能箇所）。

十五玄義（西音みすてりよといふ）のおらしよの名は数多あり。古しへは…又、人に寄てはころな共云也。此名は仏朗西といふ国に流行也。ころなは冠といふ意なり。されば十五の玄義の内御母さんたまりや御上天? ?諸々の天神聖人の位に超尚高位に?へられ給ひ、栄福の宝冠を戴き給ふ御事を観念致すを以、御主ぜすきりしと御母聖まじ奉るに?る也。故にころなのおらしよと申けるなり（注⑧）。

ロザリヨにおいて冥想される聖母十五の玄義みすてりよとは、巻第一之

第四「童身聖瑪利亞の尊き玫瑰花冠のおらしよを可申上時観念可致玄義之事」に

御母聖瑪利亞の玫瑰花冠と号して天に在す十五遍聖寵充滿百五十遍を奉申上時観念可致玄義は十五あり。初五つは御欲び、中の五つは御悲み、終五つはは栄福の玄義なり。

として挙げられているが（注⑨）、マリアが昇天して栄福の冠を戴くまでの事を記したものであり、「玫瑰花冠」は最後の玄義に現れる「栄福の冠」を指しているものと思われる（注⑩）。またさらに、このマリアのロザリオが種々の奇特をなしたいくつもの話が巻第四の「童身聖まりやろざりよに顕し給ふ奇特の事」に紹介されているが（注⑪）、その奇跡や功德の象徴でもあると思われる。

7 聖母マリアと薬草

聖母マリアと薬草との関係は深い。『玫瑰花冠記録』に「玫瑰といふは妙なる色香を含みて辺りを薫する花也。童身聖瑪利亞を此の花に喩へ」とあつたが、聖母マリア被昇天の祝日である八月十五日は薬草の浄めの日でもある。

昇天祭がさかんなのは収穫の豊饒を祈願する意味も多いが、

たのである(注⑤)。

とくに「マリアの三十日」といって夏の絶頂から大体九月半ばの秋に向う間に薬草はその有効成分が十分に成熟する。

この季節から早過ぎても遅過ぎてもよくないことを、経験

注

上、人々は知っていた。マリアが薬草への恵みを沢山与えてくれるように祈るようになった。(中略)

「神の母、聖マリヤ、われらの母よ、われらのもの、われらの愛するもののために、これらの薬草、花々、野菜をあなたのいつくしみにより稔らせ給え！」と祈る。

(植田重雄著『聖母マリア』岩波新書 Dp 1256)

蘭医方等の薬草「玫瑰」とマリアの表象である「玫瑰」とはつながっているのである。

現在では「玫瑰」という名は一部のバラ好きの人にしか知られてはいないであろう。かつては「玫瑰珠」という名の雑誌(注⑥)も発行されていたようであるが、現在ではキリスト教でも「玫瑰」の語を用いることはないものと思われる。しかし、幕末明治の頃にはバラ・Roseといえは「玫瑰」を指していたのであり、そしてこの語は馥郁たる西洋文化の香りを放つてい

注① そのことを示す古い例に次のものがある。『萬葉集』

「枳からなちの棘うばら原刈り除け」(巻16・三八三三)・「道の辺の宇万良うまらの末はに這はほ豆の」(巻20・四三五二)、『華嚴経音義私記』

「棘うまら 宇末良」、『新撰字鏡』「蕪うまら 志介志 又宇波良、又佐須」
「棘うまら 宇波良」、『和名類聚抄』「薔薇子 無波良乃美」

「拔葵 佐流止利さるとり一云於保宇波良」、『類聚名義抄』「荆 バラ」
「茨 ウバラ」
「薊 ムバラ
ウバラ ムバラ ムグラ」。新しいものであるが、一般には知られていない資料である安

永三年(1144)刊『生花枝新抄』の「活花に用いる草木名寄」の「い」の項に「棘」、「は」の項に「荆棘」がある。

注② 貝原益軒『花譜』に「薔薇しょうび かきいばらの事なり。かづ

らのごとく、かきにはひろごりて、四五間ものぶ。其たてるは、灌木のごとくなり。針多し」とあり、白井光太郎氏の『植物渡来考』にも「支那にて薔薇と云ひし植物は保

昇の説に蔓生し茎葉の間刺多く其花百葉、八出六出、或赤く或白く子杜棠子の如しとあれば今日のノイバラ、ボサツイバラ類と思はる」とある（「保昇の説」とは『本草綱目』の「営実牆靡」の項の集解に引かれている蜀の韓保昇の説のことである）。

注③ 英語の Rose の語源については新村出（『薔薇露』）に次のような説明がある。

ラテン語のローザから来たことはもちろんだが、そのローザはギリシヤ語のロデアまたはローデーから出たのである。このロデアの語形は、ギリシヤ語の普通の語形ではロドンといい、既にホメーロスのある詩にも出ている。ギリシヤではバラ色の指、ロドダクテュロスなどという形容もあつて曙の女神すなわちアウローラの形容に使つた。またガニメーデースの指をもバラユビとよんだ。

注④ 白井光太郎「日本園芸史」に「本邦固有の薔薇に至つては纔に野生の数種あるに過ぎず」という朝倉豊義著『長春園薔薇類集』からの引用がある。

注⑤ 漢籍では「玫瑰」は赤色の美石の名として現れ始める。

周の『韓非子』外儲説左上に「綴以三珠玉一飾玫瑰一輯二羽

翠」とあり、漢の『急就篇』三に「璧碧珠璣玫瑰甕」

「注」玫瑰、美玉名也、また『史記』司馬相如伝に「其石則赤玉玫瑰」

「注」集解曰、玫瑰、石珠也、後漢の『漢書』司馬相如伝注に「張揖曰、玫瑰、火齊珠也」など（以上、諸橋『大漢和辞典』による）。これに対して植物名の

「玫瑰」は、例外的に晩唐の『西陽雜俎』（段成式著）続集・支植上に「洛陽の花木を販売する者の話によると、高山の奥深いところに、碧花玫瑰があつたが、いまは亡くなつてゐる」という例があるが、多くの用例が見られるよ

うになるのは明の時代からである。王世懋『学圃雜疏』（萬曆十五年1587成）、張謙德『瓶花譜』（萬曆二十三年1595成）、王圻『三才圖會』（萬曆三十五年1607成）、袁

宏道（1568-1610）『瓶史』（成立年未詳）に現れ、この頃の偽託書と言われる李時珍の『食物本草』にも現れる（岡

西為人著『本草概説』昭和五十二年創元社刊p.384。『本草綱目』には見えない）。また、この明代後期には、呉中

ではこの花を栽培し、利益を得ることが多かつたという（以上、佐藤武俊編訳『中国の花譜』平凡による）。清代の『群芳譜』また『秘伝花鏡』に見える「玫瑰」の記事は本

文中に引用した。

注⑥ C. M. スキナー著『花の神話と伝説』（垂水雄二・福屋

正修訳、1999.6 八坂書房）に、

実際ヨーロッパにおけるバラ崇拜はきわめて強力なものであったから、中世には、とくにバラの名を記す祭日があった。というのは、その頃には、ウエスタが輝かしいギリシヤの神々のあとにしたがつてしぶしぶこの世を去ってしまったために、バラは聖母マリアの花となったのである。（p.267）

とある。また、植田重雄著『聖母マリア』岩波新書（p.191）に、

伝説によれば、人間がまだ罪を犯さないときには、薔薇はまだ棘を持つてはいなかったが、アダム、エバアが罪を犯し、楽園を追い出されたとき、棘がつくようになってきた。マリアが楽園を回復させたとき、再び棘がなくなつたともいう。それゆえマリアを「棘なき薔薇」とも讃える。

と見える。

注⑦ 慶長五年（1600）長崎の後藤登明印刷所刊行の『ドチリ

ナ・キリシタン』にも、

尊ときびるぜんまりやのるざりよ申して百五十返のおらしよの事

と見え、「玫瑰」などの語には訳されていない。

注⑧ 続けて『玫瑰花冠記録』は次のように記す。

此証拠には或人の申上しがらさ充滿と天に在すのおらしよを御母さんたまりや花の形に受給ゐて御子耶蘇に捧げ給へば御子は則夫を以、妙成御冠を造り給ひ御母に戴かせ□？らせられたる御奇特あり。

注⑨ 十五玄義は次のように記されている。

御歛五箇条之言義之事

第一 童身聖瑪利亞はさんがぶりゑる大天神を以、御告を蒙り給ひ、於御胎内天主子人界を請給事

第二 尊き童身聖瑪利亞ハ御親類なるさんたいざべりなの御宿所に為御見舞赴き給ふ事。

第三 尊き童身聖瑪利亞は御子耶蘇基利斯督を御誕生し給ふ事。

第四 御子耶蘇の誕生より四十日目に御母聖まりやは御堂に詣り天主父え捧げ給ふ事。

第五 御母聖まりや御子御子十二歳の御時見失給ふをぜ

たざれんの於御堂、学匠等の為に御講釈して居給ふを三日目に見付けられ給ふ事。

御悲み五箇条之言義之事

此中の五ヶ條を御悲みの玄義と申は御主せずきりしと請忍らへ給ふ御ばつしよの御苦患を御母さんたまりやハ御ふにまにて凌ぎ給に依てなり

第一 御主耶蘇基利斯督ぜつまにやの森の中にて御おらしよを成し給ひ、御血の汗を流し給ふ事

第二 石の柱に搦め付られ給ひ、数々の打擲を受け給ふ事

第三 御頭に荊の冠を押込れ給ふ事

第四 掛り給ふべき十字架を担げ給ひ、からわりうの山え赴き給ふ事

第五 十字架に掛り死し給ふ事

栄福五箇条之言義之事
此末の五ヶ條を栄福の玄義と申は御主御蘇生の後ハ御色身にも栄福を受給同く御母さんたまりあ御上天を遂給ふ御事を觀しけるに依てなり

第一 御主耶蘇基利斯督死し給ゐてより三日目に復活給ふ事

第二 御主耶蘇基利斯督蘇生り給ひてより四十日目に御上天し給ふ事

第三 御主耶蘇基利斯督御上天の後十日目に聖神は御母聖瑪利亞并御弟子達の上に天降らせ給ふ事

第四 御母聖瑪利亞御靈魂御色身共に御上天を遂給ふ事

第五 童身聖瑪利亞於天栄福の冠を戴き給ふ事

以上十五の玄義觀べき條々なり
注⑩ その中の一つに次のような話がある。細部は異なるが他の書にも紹介されることが多く、マリアとバラとの關係を示す話として有名であるので、特に掲げておくことにしたい。

…其後、或神父と共に他行あるに、茂りたる山を越へらるるを、山賊数多待請て居り、幸ひいざ彼神父を打剥取すべしと思ふ処に、神父は其日未だ玫瑰のおらしよを勤めざる事を思ひ出され、山より卸て、信心を催し、おらしよを申さる也。其時、山賊共は神父居らるる辺りをつくく、と見れば、容顔美麗成女人在して、神父がらさち

みちのおらしよを一遍申上らるれば、其口より白き花一口宛受取、天に在すのおらしよの時には紅ひの花を受取給ひて、赤白の色の花にて見事成冠りを造り、夫を冠り給いて見へ給はざる也。山賊共是を見て然而悪念を醸し、

神父に近付き巧みたる科の御赦しを乞ひ申す。御奇特の有様を語るなり。唯今御身の前に居給ふ女人はいか成御方ぞ、又何たるおらしよを申給ひけるやと尋ね申ものなり。神の御返答に我前に誰か有つる事を更に覚へず。我が勤めたるおらしよは玫瑰のおらしよ也と仰せければ、山賊其時彼女体は疑ひなく童貞さんたまりやにて在すなりと弁へ、其時迄の悪行を醸し聖きろざりよのおらしよを信仰して善に立上り臨終正念にして死ぬしれるなり。

注⑪ 聖母十五玄義図の第十五図には聖母が昇天し花冠を戴く場面が描かれるが、その花冠が天使によって聖母の頭に載せられる絵もあるという（植田重雄著『聖母マリア』岩波新書 p.191）。『日本植物方言集成』によると、大分県ではバラをテンシボタンと呼ぶ。大分はキリシタン大名の大夫義鎮（宗麟フランシスコ）の地であり、あるいは天使ボタンの意味であろうか。

注⑫ ただし、筆者が確認できたのは大正九年に出された三十一号（久能木慎治編）のみである。

注⑬ 現在の中国ではバラ科バラ属の三大種は「玫瑰」*Rosa rugosa*、「薔薇」*Rosa multiflora*、「月季」*Rosachinensis*であるが、単にバラを指すときは「玫瑰」を用いるようである。



「玫瑰」*Rosa rugosa*
（シーボルト『日本植物誌』より）